

歴史戦に勝つため

産経新聞が「歴史戦」を連載している。中韓は従軍慰安婦や南京大虐殺などなかったことを「あった」と主張し諸国に宣伝に努めている。この戦いに負けるかどうか。日本国民が「魂」を失う。だから負けてはならない。しかし私達には喜んで自らの歴史を歪曲してきた歴史がある。

世界一だった飛行機製造技術

「注意、興味、連想、欲望、比較、確信、決断」を購買心理の七段階という。商品を買ってもらうために優れた営業マンはお客様の心を上手に導いていく。

小説も商品である。最初の一ページ、書き出しが命である。ここで読者の注意、興味、連想を呼び起す。それができれば成功、できなければ読者は後を讀まない。死して後いよいよ洛陽の紙価を高らしめている吉村昭（平成十八年没）はいつも書き出しは読者の注意、興味、連想を意識している。「零式戦闘機」の冒頭は「牛車」である。

夜、提灯をつけた二台の牛車が道を行く。名古屋の工場から岐阜県各務原の飛行場まで四十八キロメートルを二十四時間かけて行く。ゆっくりとした牛の歩み。荷車には飛行機の試作品の完成品が積み込まれている。運搬時の震動で製品が傷まないようトラックではなく牛を使った。

技術の粋を集めて作られた戦闘機と鈍重な牛の対比が鮮やかである。読者は興味を持ち、自分が提灯を手を引いて夜の山道を歩いている気分になる。引き込まれて次へ進み、一気に読み切る。

海軍の零式戦闘機は紀元二六〇〇年（昭和十五年、一九四〇）にこの年昭和十二年に完成した陸

完成運用されたので、その〇をたつて零式と命名された。

余談だが二月十一日は国民の祝日「建国記念の日」である。かつては「紀元節」と言われた。神武天皇即位の日が元年二月十一日。今年が紀元二六七四年である。

陸軍の主力戦闘機は「一式」と命名された。紀元二六〇一年に完成したので一式、後に隼の呼称で親しまれた。

零式と一式、海軍のゼロ戦と陸軍の隼が大東亜戦争の初期の戦勝の立役者である。

盧溝橋事件をきっかけに始まった支那事変（昭和十二年、一九三七年）の当時、戦闘機はドイツ、ロシア、アメリカ、イギリスのものが優れており、日本のものは質量ともに数段劣っていた。いや、欧米諸国はみなそう思いそう信じていた。日本の飛行機など眼中になかった。

ところが蒋介石の国民党軍がドイツやアメリカから支給された戦闘機と爆撃機が日本の戦闘機にこごとく撃ち落とされた。

その報告を聞いたアメリカ本国は「何かの間違いだろう」と信じなかった。日本の戦闘機は我々より十年は遅れており互角の戦いができるはずがない。もし本当だとしたら中国人パイロットの腕が劣っていたからだろうと。

この年昭和十二年に完成した陸

軍の九七式戦闘機（二五九七年製）は零式、一式まではいっていいないが、性能は他国のものより格段に優れていた。日本の飛行機作りの技術は十年の遅れをあとという間に追いつき、そして追い抜いていたのである。

戦闘機同士の空中戦で日本機に敵う機はどこにもなかった。戦争は兵隊が使う武器を作る技術者の腕も関わっている。武器の性能が勝敗を左右する。

昭和十四年ノモンハンでソ連軍と戦った時の戦闘機はこの九七式である。ソ連の「高性能」戦闘機と対戦。撃墜された九七式は一七九機、撃墜したソ連機一六七三機。空中戦だけでなく地上攻撃による撃墜、それと爆撃機の撃墜も含まれるが、パイロットの腕も含めた性能の差は大差。一機で十機を倒して勝ったのである。

私は戦争を讃美する者ではない。だが戦争に関わることを書くだけで、「軍国主義！右翼！」とないと思うのだ。

「違います。本当はこうですよ」と言っているだけである。零式戦闘機に代表される日本の戦闘機は無敵で世界一だった。この事実までなかったことにして「日本は弱かった。悪かった」と言うことは

「違っています。本当はこうですよ」と言っているだけである。零式戦闘機に代表される日本の戦闘機は無敵で世界一だった。この事実までなかったことにして「日本は弱かった。悪かった」と言うことは

「違っています。本当はこうですよ」と言っているだけである。零式戦闘機に代表される日本の戦闘機は無敵で世界一だった。この事実までなかったことにして「日本は弱かった。悪かった」と言うことは

「違っています。本当はこうですよ」と言っているだけである。零式戦闘機に代表される日本の戦闘機は無敵で世界一だった。この事実までなかったことにして「日本は弱かった。悪かった」と言うことは

経宮管理講座 306 染谷和巳

ハン」の冒頭に書いている。人民の国が自国の兵を撃ち鎖でつなぐ。思想の自由を認めず逮捕し処刑する。従わない人々はまとめて虐殺する。

日本は確かに赤紙一枚で召集されるが、男は家族を村を国を守るために敵に向かう。一兵卒でも国のために尽くすことに誇りを持っている。

五味川は、すばらしい赤色革命「目が眩んでこんな単純な事実が見えなくなっていたのだ。だが人々はその小説を信じた。それにはアメリカが行った戦後の占領政策が深く関わっている。当時はアメリカでもソ連の手先の共産党員が勢力を増していた。GHQ（連合軍司令部）の中核に多くの共産党員がおり、そうした人が中心になって、財閥解体、農地改革、公職追放などの政策をつぎつぎと打ち出した。

日本共産党幹部に労働三法を作らせ、労働組合を強化して資本家や経営者の力を削いだ。

民主主義の名のもとにこうして日本のソ連化、共産化が着々と進んだ。日本人の多くが、学者も小説家も「虐げられた労働者を幸福にする」思想を賛美し、ソ連を伏し拝んだ。

それともう一つ、日本人の考え方を大きく変えた出来事がある。アメリカは日本民族の精神を破壊するために言論統制し、教科書を作り直し、神道を足蹴にし、忠や義の精神を賛える時代劇まで禁止した。そして戦犯処刑の「東京裁判」で止めを刺した。

自虐史観。日本は悪い国、戦前の軍隊は無謀残虐な悪の集団だったという意識が全国民に浸透し、自衛隊を白眼視し、武力を絶対悪とする反戦平和主義が世論の大勢を占めた。

昭和三十年（一九五五）のベストセラー「人間の条件」（五味川純平著）がその自虐史観の背中を押して日本人を崖下へと突き落とした。大学は軍事学の科目を削除し、軍事については語ることを許さない世の中ができた。

そこに一石を投じたのが「坂の上の雲」（昭和四十三、四十七年産経新聞連載、司馬遼太郎著）である。昭和になって軍隊は悪くなつたがそのわずかな三十年前の日露戦争当時の日本の軍隊はすばらしかったと書いた。

「坂の上の雲」は白人大国ロシアの世界最強といわれていた軍隊を日本が打ち破った歴史的事実を私たちに提供した。

私たちが先人に東郷平八郎、乃木希典、秋山兄弟など多くの偉人英雄がいたことを知って、日本民族は立派ではないか、誇りを持っていいではないかと思つた。

自虐史観の厚い「卑屈の壁」が「坂の上の雲」によってポロポロ崩れた。半分、五〇%。

明治はよかつたが昭和はダメ、これが残り五〇%の自虐史観であり、司馬遼太郎の考え方もこれと同じ、というより司馬はこの考え方の代表者の一人であった。

ともあれ「坂の上の雲」が日本を明るくした。これからもこの小説は日本人の必読書であり続けるだろう。同時に福井雄三の「歴史の真実」を併せ読めばさらによい。

は「人権」を武器に戦う」と哀れな存続宣言を行った。

私たちの意識は健康を回復しつつある。だが国に対する誇りと祖先に対する感謝の心を潰そうと中韓が歴史戦を仕掛けてくる。

立ち開かる中国韓国の歴史戦

平成三年（一九九一）ソビエト社会主義共和国連邦は崩壊した。ソ連に占領されることを心秘かに願っていた土井たか子社会党は急速に衰退した。左派勢力は「革命」の看板を降ろして「これから

立ち開かる中国韓国の歴史戦

立ち開かる中国韓国の歴史戦

立ち開かる中国韓国の歴史戦

立ち開かる中国韓国の歴史戦